

かみす

Pick up

- ▶2021年度区長を紹介します！
- ▶狂犬病予防集合注射

特集

※まちの魅力再発見※

みんなでつくる青空ギャラリー

1000人画廊

潮風を感じる南海浜護岸。白い壁面には、市民をはじめ多くの人によって描かれてきた壁画が連なっています。最近ではSNSでも話題の撮影スポットです。1000人画廊がつけられることになった当時の想いと、壁画制作に参加している現在の参加者の声を紹介します。

AR 広報かみすが
動き出す



[COCOAR2]



アプリをダウンロードし
表紙にスマートフォンを
かざしてください。
詳細は14ページ

特集

1000人画廊

みんなでつくる青空ギャラリー

6キロメートルにわたって護岸壁を彩る青空ギャラリー！
力作の一つひとつに、「美しい景観をつくり、みんなで守りたい」という市民の思いが込められています。今回は、1000人画廊の誕生から今日へと続く30年の歩みを紹介します。





市民の描いた壁画が、6キロメートルにわたり続く。展望見晴台「海風の見える丘」からは、壁画と海と風車を見渡せる。

大自然との一体感が魅力

真つ青な海と空を背景に、潮風と太陽を浴びながらアートを楽しむ。

そんな開放感あふれる神栖市自慢のスポットが、1000人画廊です。

場所は、日川浜から鹿島港方面へ続く南海浜護岸。その護岸壁をキャンバスに、市民が描いた縦2メートル・横4メートルの大きな壁画がどこまでも連なっています。メルヘンチックな作品や幻想的な作品、風景、食べ物、動物など、テーマも作風もバラエティに富み、「どんな人が描いたのかな?」「どんな思いを表現しているのだろうか?」と想像がふくらみ、いつまでも見ていることができます。

2010年には、1000人画廊に沿うように真つ白い風車が立ち並びました。これは日本初の本格的な洋上風力発電施設で、「壁画」と「海」と「風車」が三位一体となって美しい景観を生み出しています。

ドラマやミュージックビデオなどのロケ地として人気が高まり、芸能人のブログで紹介



されることも。またSNSでも話題の撮影スポットになっています。

1000人画廊の誕生物語

1000人画廊がつくられることになったのは、今から約30年前の1990年のこと。当時、護岸壁はスプレーによる落書きだらけで、近くを歩くのにも不安を覚えるような場所でした。ちょうどその頃、市では観光客を呼び込もうとさまざまな取り組みをしており、その中で出てきたのが、落書きを白く塗りつぶし住民に壁画を描いてもらうアイデアです。描く人も観る人も、とにかく大勢の人に楽しんでもらいたいという思いを込めて、「1000人画廊」と名付けました。

1000人画廊ゾーン(一般参加者)、水族館ゾーン(画家など)、フリーゾーン(地元企業など)の3つのゾーンを設定し、制作者を募集。参加者は総勢2800人に上りました。当時、商工観光課の職員として事業を担当した沼田実さんに、制作中の様子を聞きました。

「市では、汚れていた護岸壁の洗浄や、参加者への画材の提供などを行ないました。夏の暑いさなか、家



1990年当時の制作風景

族や友人、職場の仲間たちが楽しそうに壁画を描いている姿に感動しました。グループで参加し、自分たちの夢などを描いた心温まる作品が多かったように思います。また、アーティストとして活動されている方の、素晴らしい技巧による芸術的な作品に出会えたことも印象に残っています」

1000人画廊の完成は、大きな反響を呼んだと振り返ります。

「神栖に新名所が誕生し、落書きだらけだった護岸壁がしゃれたドライブコースに変貌を遂げました。日川浜の海水浴場とオートキャンプ場に1000人画廊が加わり、日川浜エリアとして市外におすすりめできる



神栖第三中学校美術部の活動の様子。10年以上前から1000人画廊の壁画制作に、代々参加している。2019年には4作品を制作。



「海と太陽」



「母なる海」



「海と向日葵」



「空飛ぶ風船」

観光スポットになったと思います。観光客が増えただけでなく、他の自治体からの視察もありました」

18年後の修復、そして再制作

こうして神栖市の誇る観光資源となった1000人画廊。しかし、色鮮やかな壁画は長年風雨にさらされて徐々に色あせ、壁面の老朽化も目立つようになりました。追い討ちをかけるように、いたずら書きが出現このまま放置すれば、人々の足が遠のく場所へと逆戻りしてしまいます。

市民から壁画の修復を望む声が寄せられたのを受け、市は2008年に再制作に着手。欠け落ちたコンクリートを修復し、白いペンキを塗って、再び制作者募集の呼び掛けをしました。

2008年には48点、2009年には59点、2010年には36点の新作が続々と加わり、1000人画廊の再生は盛り上がりを見せました。今度はなるべく劣化を抑えようと、色落ちしにくい塗料を提供し、完成した壁画は保護材でコーティングしています。2011年の東日本大震災により護岸周辺が破損し、一時中断。2013年に再開し、それから

ほぼ毎年30、50点の新作が登場し、今後も増え続けていく予定です。

1000人画廊を見ていくと、描かれたばかりの色鮮やかな壁画もあれば、少し色褪せて、かすれが目立つ壁画もあり、30年間の修復・再制作の歩みを感じ取ることができます。

神栖第三中学校美術部の取り組み

2019年度に制作された30作品のうち4作品を手掛けたのが、神栖第三中学校美術部の生徒たちです。10年以上前から壁画制作に取り組んできた同美術部を訪ね、新3年生の3人に話を聞きました。

制作は、約30人の美術部員全員が画用紙に原画を描くことからスタート。それを部内で投票して12点まで絞り込み、市観光協会に応募。審査の結果4点が選ばれ、それを受けて部員を学年混合の4グループに分け、協力して壁画を描きました。

部長の坂本真彩さんが、初めて参加した時の思いを話してくれました。「先輩たちが代々描いてきた



美術部顧問の富士先生

1000人画廊に、いよいよ自分も参加することになり、楽しみでドキドキしました。いつまでも残るものなので、後輩たちに胸を張って見せられる作品にしたいと思いました」

制作現場となる護岸に、ブルーシートや脚立、画材道具を運び、いよいよ制作開始。まず描く範囲をガムテープで囲い、次にチョークで原画の通り下絵を描きます。自分の原画が選ばれた田島椿さんは、「太陽は大体このあたりかな、と見当をつけながら下絵を描いていきました。上の方は脚立に乗って描くので、バランスを取るのが難しかったです」と言います。

原画ができれば、そこに色を塗って仕上げていきます。森本優衣さんは、「塗っているそばからペンキが垂れてしまうし、はみ出したら乾くのを待つて重ねて塗らなければならず、絵の具と違って難しかったです」と、扱い慣れない塗料に悪戦苦闘したそうです。

壁画制作は、かけがえのない夏の思い出

制作期間は、夏休み中の1週間。熱中症に気を付け、流れる汗を拭き

ながらの作業。にわか雨に降られ、ブルーシートを被ってしのいだこともあったそうです。そうして、みんな力を出し尽くして無事に完成しました。

「壁画を描く過程で、先輩や他の部員と仲良くなれました。部活動で夏の思い出ができたことがとてもうれしかったです」(坂本さん)

「普段の部活動では経験できないことなので楽しかったし、みんながいたからできたのだと思います」(田島さん)

「ペンキで描くのは新鮮で、新しい楽しみが見つけれられました。大変だったけれど、終わってしまうのが寂しかったです」(森本さん)

顧客の富山

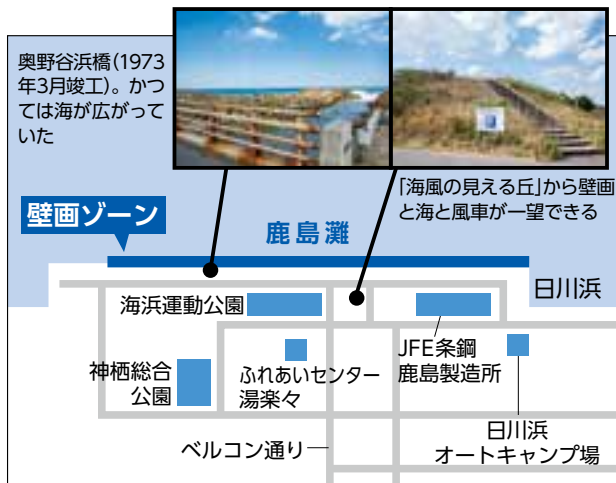
真愛先生は、1000人画廊に参加する意義を次のように話します。「景観を守る取り組みに生徒たちが参加することは、地域貢献につながります。もう一つ、運動部の



市民をはじめ多くの人が参加してつくってきた1000人画廊



毎年8月から9月にかけて制作



ような対外試合のない美術部にとって、1000人画廊はそれに代わる重要なイベントです。学年を超えた共同作業で部員が仲良くなれたこと、壁画制作をやり遂げて成功体験ができたことは、非常に良かったと思います」

素敵な場所は、すぐそばにある

今回、1000人画廊の「昔」と「今」を聞いた2人に、今後への思いを語ってもらいました。まず、神栖第三中学校の坂本さんです。「神栖市はあまり目立った観光地がないと思われています。でも、ちゃんと見れば素敵な場所がたくさんあるので、私たち市民がアピールして、た

くさんの人に神栖市の良い所を知ってもらいたいです」

もう一人は、冒頭で誕生の経緯を聞いた沼田さんです。「市民の協力を得てこの事業が30年も続けられたことは、驚きであり誇りにも思います。これからも壁画制作を50年、100年と続けていけるよう、世代間でのバトンを絵の具に託してつないでいただけたらと願っています」

市民の深い思いに彩られた護岸壁があることは、神栖市の誇りです。初夏の日差しが降り注ぐ1000人画廊を、いつもより丁寧に鑑賞してみませんか？